

# ジェノサイド後のルワンダにおける二元論を超えた平和の探求

— キガリ・ガサボ地区の土器コーペラティブの事例を通じて —

秋山美香

キーワード：ルワンダ、トゥワ、コーペラティブ、下からの平和、平和資源、

ホスピタリティ

## 要旨

本論文の目的は、少なくとも 50 万もの人々が犠牲になったジェノサイドから 30 年を迎えるルワンダにおいて、人口の 1%未満である少数民族・トゥワがどのように他民族と関係を築いてきたのか、さらにコーペラティブ（労働組合）という枠組みが持つ友好的な関係構築の可能性を、平和という視座から明らかにすることである。

1 章では本論文における問題意識や研究目的を提示する。

2 章では、先行研究のレビュー、特に栗本 [2000] が重要性を強調した「下からの平和」や小田 [2014] による「平和資源」といった概念のレビューを通じて、本論文を平和の人類学の試みの一つとして位置付ける。さらに、ルワンダのジェノサイド・和解プロセスの文脈や、それらに関する研究がトゥワという第三者の存在を不可視化してきた事実、ルワンダのコーペラティブにおける和解実践の先行研究を踏まえて、本論文のオリジナリティを述べる。

3 章では、フィールドであるルワンダの概要、民族をめぐる歴史や言説、トゥワと他のルワンダ人との関係性の歴史、土器づくりの歴史、コーペラティブの成り立ちと概要などを概観し、本論文に必要な文脈を提示する。

4 章では、調査方法と倫理上の懸念について説明する。

5 章では、主なフィールドであるルワンダのキガリ・ガサボ地区にある Modern Pottery Cooperative（以降 MPC）の概要や日々の営みについて述べる。

6 章では、ウムガンダや話し合い、日常の喧嘩といった交流を通じて、MPC の大部分を占めるトゥワと少数のフトゥメンバーが協働して運営に携わる様子を描き出す。また、その関係性は MPC に関連する外部のステークホルダーにも広がっていた。

7章では、一見して徹底されている「ルワンダ人」というアイデンティティの奥に、スラングを使用して民族を区別する行為や、民族に基づくステレオタイプの受容がMPC内に存在することを指摘する。また、MPC外部ではトゥワに対する差別や偏見が根強く残ることを記録しつつ、ステレオタイプに当てはまらない人々についても記述することで、トゥワを含むルワンダ人が現在ステレオタイプやアイデンティティ等の変遷プロセスの中にあることを論じる。

8章では、フィールドワークを通じて浮かび上がった、MPC内のトゥワメンバーとフトゥメンバー間の経済的格差や微妙な力関係について記述する。同様の格差は他のコペラティブや、コペラティブに所属しないトゥワに関する調査でも確認できたことから、マクロレベルの格差によって内部の人間関係が影響されるというコペラティブの脆弱性が明らかになった。

9章では、これまでの議論を「上からの平和」と「下からの平和」という観点から整理し、特に「下からの平和」においてコペラティブが平和資源として持つ他民族間の関係構築を促す役割を示す。また、接触仮説を用いて主にトゥチ・フトゥ間のコペラティブにおける和解に注目してきた先行研究に対して、本論文が貢献し得る点を述べる。さらに、常に弱者の立場に立ってきたトゥワが、それでも他のルワンダ人との交流を拒絶しない姿勢に着目し、佐川[2011]、小田[2014]、鷺田[1999]の研究を踏まえて、トゥワが受容する可傷性とホスピタリティ、それらの行為が持つ平和への可能性について議論する。

10章では、本論文をまとめ、研究目的に対する回答と課題を述べる。ルワンダのジエノサイドやコペラティブに関する研究の中で周縁化・不可視化されてきたトゥワの視座を提示することや、より大きな視点でとらえれば、紛争や戦争を二グループ間の対立という二元論に収束しがちな分析に第三者を主眼に置いた本研究を加えることで、平和研究や平和の人類学に貢献することを期待する。